

# ペアでの対話活動における評価基準表の活用

西中克之（墨田区立隅田小学校）

キーワード：ペア活動、対話活動、評価基準表(ルーブリック)

## 1 研究の経緯

昨年度の研究では、同じ協同学習の技法を用いた活動を行っても、ペアやグループで学ぶことに対して肯定的な見方をしている児童と、否定的な見方をしている児童が存在していることがわかった。詳しく聞き取りをすると、両者の感じ方はそれぞれであっても、自分の話す場が保障されることを求めるという点では共通であった。そこで得た結論は、児童が円滑に協同学習を進めるための技能を身に付けさせる場を、教師が意図的に設定する必要があるということであった。

## 2 ペア活動の設定の意図

現在担任している学級の児童は、自分の気持ちを言葉を紡いで伝えることが苦手な児童が多く、授業で協同学習を用いても、自分の思いが伝わらなかったり、聞き方が不十分で自分の思いを受け止めてもらえない不満を感じたりする児童が存在し、トラブルになってしまうことがあった。言葉のやりとりが苦手な児童が多いので、相手をはっきりさせるためにペアでのやりとりに絞って活動できる場を設定した。

## 3 実践を進める上での仮説

自分の話を落ち着いて聞いてもらえる場(今回はペアに限定)をつくることによって、友達とのやり取りを肯定的にとらえることができるだろう。

## 4 実践した単元と目標

○国語科 単元「くらべて発見しよう」

単元の目標 共通点や違う点に気を付けながら友だちと話し合えることができる。  
→友だちの言っているスピーチの内容を正しく聞き取ることができるようにする。

## 5 実践の概要

### (1) 安心して話せるように 原稿作り

メモをもとに話をすることに難しさを感じている児童がいたので、スピーチの原稿を300字程度の作文に書くよう促した。この分量の作文は、3年生の2月から1か月間取り組んだ学習だったので、比較的抵抗は少ないと判断した。

作文のテーマは、朝起きてから家を出るまでのこととした。「おはよう」という挨拶と、朝ごはんは多くの児童が経験しているので書くことが苦手な児童も一定の量は書けた。

## (2) 具体的な評価基準の設定

話したり聞いたりするための視点を提示するために、評価基準表(ルーブリック)を作成した。児童に基準を意識させるために、毎時間自己評価もさせた。評価基準表では、話す・聞くそれぞれ3項目ずつ設定した。授業は2回に分けて行い、1回目は、話すことの基準の説明と評価に重点を置き、2回目は聞くことの基準の説明と評価に重点を置いた。

### <今回提示した評価基準表>

	内容	よくできた 3点	だいたいできた 2点	不十分 1点
話す①	目を見る	相手の目を2回以上見て話した	相手の目を1回は見て話した	相手の目を見られなかった
話す②	間を空ける	相手の反応を見ながら、話すスピードを考えて話した	「,」「。」の場所を区切って読めた	最後まで読んだ
話す③	時間を守る	1分 ± 5秒以内	1分 ± 10秒以内	1分 ± 15秒以上
聞く①	目を見る	相手の目を3回以上見ながら聞いた	相手の目を1~2回見て聞いた	相手の目を見られなかった
聞く②	うなずき あいづち	話の間に、うなずきやあいづちを3回以上入れながら聞いた	話の間に、うなずきやあいづちを1~2回以上入れながら聞いた	うなずきやあいづちをいれられなかった
聞く③	リピート	ほとんどリピートできた	半分以上はリピートできた	1/3 はリピートできた
お礼	お礼を言う	いいところを2以上見つけてお礼を言う	いいところを1つ見つけてお礼を言う	「どうもありがとう」と言う

## 6 実践を通しての所感

今回の実践で、得たことは、①メモづくりによって「話す内容がない」児童がいなくなったこと、②話し方や聞き方を評価基準表によって話す観点、聞く観点がはっきりしたのでペアでのやり取りに集中できるようになったことの2つである。児童は活動中に、やる事が明確になったので、混乱することが少なくなった。

メモの作り方、話の仕方、ペアでのやり取りの観点については、繰り返し指導し定着させていく必要がある。評価基準表を用いた自己評価も続けさせることで、この形式にかかわらず、他教科であっても対話活動がより円滑に進むと考える。円滑な対話活動を行うと、児童は笑顔になる。また、自信がもてる。ペアでの対話活動の成功体験を積み重ねながら協同学習のさらなる深化をはかっていきたい。